

「図書館史研究会」(仮称)の設立について

過日、図書館史研究に関心を抱く者六名が集まり、わが国での図書館史研究の現状、過去における研究グループの消長、研究会発足の意義と見通しについて意見を交しました。各人それぞれの立場から、発言は活発であったものの、問題も少くないことを改めて知り、ただの希望的観測で歩み始めることの愚を知らされた次第です。

とはいえ、参加者一同には、図書館史研究の充実した討論および発表の場を何とか設けられないだろうかとの一致した意向があることは確かです。このため、今後「図書館史研究会」(仮称、以下「研究会」)をとりあえず発足させる方向で懇談会を続け、同時に参加者を全国的に募って、ご意見をお寄せ頂くとともに、この問題に関心をお持ちの先輩・同輩の諸兄弟姉からも御意見を仰ぎたいと考えました。

「研究会」が目指すのは、図書館史に関する調査研究であつて、学習、啓蒙を一義的に考えるものではありません。会員各自がその研究において他に裨益しうる発表をたとえ小規模でも実現させることにあります。

なぜ現在「図書館史」を取上げるのか、最初の集りでもこの点は問題になり、今後とも議論を重ねねばならない点は多々あります。図書館史研究は、図書館研究ならびに歴史研究の基礎であると考え、理想としてはこの研究が図書館学ならびに歴史学に役立ち、ひいては人間とその文化遺産の理解に役立つものでなければなりません。理想はともかく、現実の問題としては、図書館学ことに図書館学概論の構築に直接役立つ基礎研究を一つずつ発表してゆくことの必要を感じます。そして、情報化社会と言われる変動のなかに身を置いている者として、図書館の側から歴史を、また歴史の側から図書館を見きわめ、オリジナルな視点を拓くことも必要と考えます。さらに言うなら、立場はさまざまであれ、図書館史に興味を抱き、発表の場と互いの発表による刺激の場を望んでいる者が少数にせよ存在するということです。

図書館史研究として取上げたいのは、方法論であり、対象の批判的解釈であり、そのための比較検討であり、そして資料の発見、発掘であります。研究を目指すからには単なる紹介、趣味としての歴史は前面に出さないで会を成立させたいものと願っております。率直に言つて、わが国の図書館史研究は少数の成果を除いて、水準は決して高いとは言えず、各人がタコつぼ的に自分の領域を抛りどころとするだけで、他のつぼをのぞいて見ることもし少ないと言えます。この状況を改善するのは容易ではないでしょう。しかしこのままでは今後立派な研究はこれまでに以上に出にくくなるのではないかと思います。

図書館史の取扱うべき範囲について、明確な線を引きするのは難しいようです。さしあたり地域と時代は限定せず、主題も図書館に関係ありと各自が判断できれば書誌学をふくむ広い範囲に亘つてもよい、ただし極端に過ぎる場合は今後の討論に待ちたいと考えております。

組織としての「研究会」の姿にはいくつかの問題がありますが、当面は規模も大きくし

ないし、名目だけのメンバーを予定していたずらに数を増やす積りはありませんので、学会や協会への帰属は今のところ考えておりません。ただし公表に価するものは積極的に発表の手段を探すことを考えたいので、いずれ支持層についてもはっきりさせねばならないでしょう。

発表の場を先に予定するのは困難でもあり危険も伴いますので、まずは「研究会」の趣旨を訴え、諸兄姉の御意見を聞き、ニュースレターか会合の形で参加者の意見を交換したいと考えました。特殊な研究会など続いたためしがないといった否定の御意見も当然ありうるので、まずは「研究会」についての反応を探りたいわけです。

事務局体制と財政はもちろん「研究会」存続の鍵でしょう。とりあえずは左記の発起人の中でこの両方をまかない、見通しがついて正式に会が発足するまではこの体制で続ける積りでおります。現在の発起人は、会の名称と同じく、発足までの準備の世話人と見て頂いて結構です。

いずれ機会を捉え「研究会」につき公表の場を得る予定ですが、まずは準備段階での御参加と先輩・同輩諸兄姉の忌憚ない御意見をいづれかの発起人にお伝え頂ければ幸いです。

一九八二年三月二十日

石井 敦

河井弘志

川崎良孝

寺田光孝

常盤 繁

藤野幸雄

(五十音順)